

共学化を機に基本理念を策定し、教育活動を改善し続ける

高槻中学校・高校は、2012年度から学校改革を進めている。まず、スクールミッションを制定し、その具現化を目指して3コース制を導入。カリキュラムも改訂し、教育の充実化を図ってきた。そうした中、14年度に17年度からの共学化が決定。5か月間の議論を経て、15年度、同校の基本理念を策定し、全校で共有。スクールミッションと基本理念に基づいた新たな教育活動を構築しようとしている。

スクールミッションを制定し、改革をスタート

大阪府にある高槻中学校・高校は、私立の中高一貫の男子校だ。例年、京都大学、大阪大学といった難関国公立大学や、医学部医学科などに多数の合格者を出している。そうした同校が、岩井一校長の就任を機に学校改革に着手したのは、2012年度のこと。まず、岩井校長の考えで、新たなスクールミッションが公募された。

「教育目標は不変ではなく、社会構造の変化に対応して変わるものではないでしょう。本校は、国家社会

を担う人材育成を目標に創立しました。ですから、さらなるIT化とグローバル化が予測される社会で活躍する人材を育むためには、今どのような教育を行えばよいのかを改めて考え、本校の教育活動を進化させるべきだと考えました」

応募された6〜7案について、校長、副校長、教頭らの管理職で議論し、新たなスクールミッションを「Developing Future Leaders With A Global Mindset」に制定（図1）。小学生にも理解できるように和訳をつけて、学校内外に発信した。

そのスクールミッションの実現に

向けて最初に動き出したのは、英語教育改革だ。ベルリッツと連携し、ネイティブ講師による中学校1〜3年生の「英会話」の授業を、それまでの週1回から週3回に増やし、コミュニケーション力育成を強化した。さらに、英語教育顧問として東京学芸大学の金谷憲名誉教授を招聘し、指導を受けた。

次に行ったのが、「探求型学習」の導入だ。工藤副校長は、12年8月にアメリカの大学6校を視察し、大学が求める学生像や、入学した学生が身につけている力などを調査して、自校でも、生徒が自ら課題を設定し

図1 「School Mission」と3つのコースの特徴

●School Mission

Developing Future Leaders With A Global Mindset

卓越した語学力と国際的な視野を持って、世界を舞台に活躍できる「次世代のリーダー」を養成することを、本校の使命とします。

●3つのコースの特徴

GL（グローバルリーダー）コース：英語運用能力を備え、グローバルマインドセットを持つ次世代リーダーを育成する

GS（グローバルサイエンス）コース：先端学力知とグローバルマインドセットを備えた生命科学系リーダーを育成する

GA（グローバルアドバンスト）コース：グローバルヘルス向上の視点を持って、国際的な諸課題に創造的に挑戦する次世代リーダーを育成する

*学校資料を基に編集部で作成



高槻中学校・高校校長
岩井 一 いわい・はじめ
教職歴42年。同校に赴任して42年目。「学校を変えれば生徒は変わる。最優の進学校を目指し、現在進行形」



高槻中学校・高校副校長
工藤 剛 くどう・つよし
教職歴27年。同校に赴任して28年目。「生徒のために、常に無二の教育機会を提供を志す」



高槻中学校・高校教頭
池田 祥行 いけだ・よしゆき
教職歴24年。同校に赴任して25年目。「他者とかかわりながら自分を高め、社会に貢献する素地を生徒に育む」



高槻中学校・高校教頭
前田 秀樹 まえだ・ひでき
教職歴21年。同校に赴任して18年目。「楽しい学び、学校生活を通して、本校にしかない価値を創造したい」

大阪府・私立高槻中学校・高校

- ◎私立の中高一貫の男子校。2014年度、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）指定校、15年度、スーパーグローバルハイスクール（SGH）アンシエイト指定校、16年度SGH指定校となる。17年度に共学化予定。
- ◎設立 1940（昭和15）年
- ◎形態 全日制／普通科／男子
- ◎生徒数 1学年約260人
- ◎2016年度入試合格実績（現浪計）
国公立大は、東京大、京都大、大阪大、神戸大などに159人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ456人が合格。
- ◎URL <http://www.takatsuki.ac.jp>

て、探究し、結論を導いて、発表する力を育てるべきだと痛感したと話す。「世界で活躍する力を生徒に育もうと考えた時、アメリカの高校教育にあって日本の高校教育にないものが、SSHで行っているような体験的学習や課題研究だと実感しました」

大学進学に向けた学力の担保も考慮し、「総合的な学習の時間」を中心に、行う「探求型学習」のカリキュラムを構築。14年度、GL（グローバルリーダー）、GS（グローバルサイエンス）、GA（グローバルアドバンスト）の3コース制を導入した（図1）。コースに分かれるのは中学校3年次であるため、より早い段階から目的意識を持つて学習に取り組むことや明確な進路意識が必要となる。それらに対応できる中学校1・2年次での指導を考え、6年間のカリキュラムを編成した。

GSコースはスーパーサイエンスハイスクール（SSH）、GAコースはスーパーグローバルハイスクール（SGH）の指定も視野に入れていたため、それぞれ関連する教科の担当者メンバーとなる委員会を結成し、

カリキュラムを構築した。

「改革にはスピードが重要です。教師全員ですべてのことを議論していたら、なかなか前に進みません。教師の能力や得意分野には違いがありま

役職、教科、教職歴の異なるメンバーで、目指す学校像を検討

そのようにして改革を進める中、創立時から関係の深い大阪医科大学と14年度に法人合併することとなり、それを機に同校の共学化が浮上した。同大学の医学部医学科の3割が女子学生であり、女子学生の多い看護学科もあった。さらに、同大学と大阪薬科大学の法人統合も協議されていた。

「女子学生の比率の高い大学と合併するのであれば、本校が男子校のままでは大学との連携がスムーズにいかないことが予想されました。そのため、いずれ共学化するのではなく、今、共学化し、学校改革を一気に進

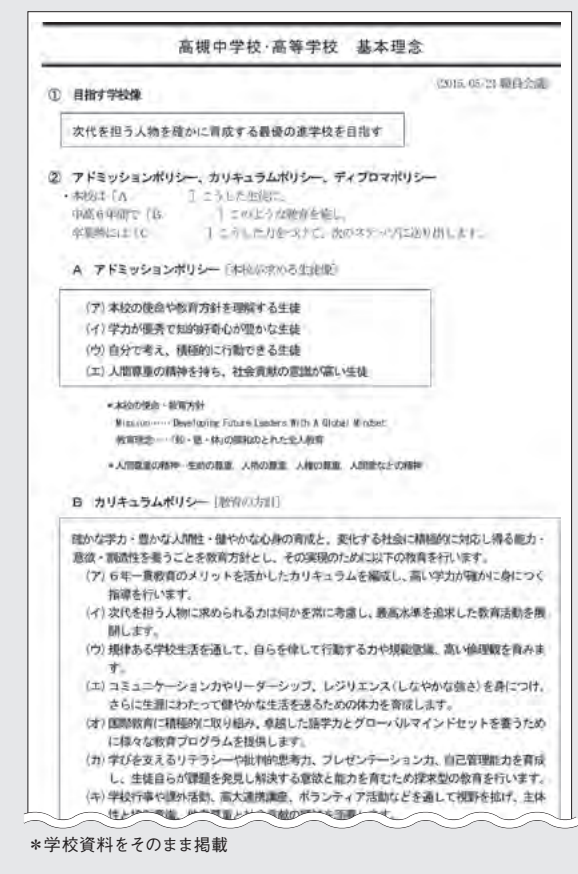
めた方がよいと決断しました。本校の中学校入試の受験者数は、入学定員の数倍はあり、地域からの評価も得ていました。だからこそ、攻めの姿勢でよりよい学校へと変えるべきだと考えたのです」（岩井校長）

14年11月に正式に共学化が発表され、12月には「共学化特命プロジェクトチーム」が結成された。校長が選定したメンバーは、副校長、教頭、各校務分掌の部長、共学校の勤務経験のある女性教師ら11人だ。15年1月の最初の会合で、岩井校長は「今までの実績もあるが、その伝統を引き継ぐだけではなく、『最優の進学校』を目指して、学校を一から設計してほしい」と伝えた。チームリーダーの前田秀樹教頭は次のように語る。

『「最優の進学校」を目指して何をすべきかを考えるために、まずは教育目標を具体的に定義していこうとメンバーで意見がまとまり、その検討に多くの時間をかけました」

メンバーは役職も担当教科も教職経験も様々であり、意見も多様だった。そこで、前田教頭は会議のテー

図2 「高槻中学校・高校 基本理念」



マを事前に伝えて意見を出してもらい、それらを集約した結果から導いた方向性を会議で議論するという手法を採った。また、大学と同様に3つのポリシー（*）を定めることとし、生徒に育みたい力を「次代を担う人物に求められる『10の資質』」とまとめるなど、教育目標の具体的な示し方を様々な観点で検討した。

「会議の内容は職員会議で報告し、そこで出てきた意見についてもチームで検討しました。チームの独断ではなく、全校の理解を得ながら形にしていっただけです」（前田教頭）

生徒の成長を実感することで 理念を真に理解できる

10回の会議を経て、15年5月、「目指す学校像」「アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシー」「次代を担う人物に求められる『10の資質』」「次代を担う人物に求められる資質を育成するための環境」が示された基本理念が策定された（図2）。

教育活動の構築時には、スクールミッションと基本理念に照らし合わせて検討する。例えば、共学化で新

しくなる制服も、それらを基に「ヤング・グローバルリーダー」「品」などのキーワードを決めて検討した。

すべての教育活動のよりどころとなるスクールミッションと基本理念は、常に意識できるよう、職員会議などで頻繁に提示する。そして最も大切にしているのは、それらの内容を教師一人ひとりが真に理解することだ。

「GAコースの高校1年生と2年生で行う海外研修は、SGH委員会と学年団が協働で運営します。計画からかかわってきた先生方は、研修先で生き生きと発表する生徒の姿を見て、取り組みの意義を真に実感します。そのような体験を教師一人ひとりがしていくことで、学校全体のベクトルがそろっていくのではないのでしょうか」（工藤副校長）

生徒の成長する姿にやりがいを感じられれば、教師の多忙感の解消にもつながる。生徒の成長を見える化して、教師に実感してもらう工夫も必要だと、工藤副校長は言う。

理念の具現化を目指し、ALの推進、ICT教育を本格化

基本理念が策定されると、次の段

階として授業改革を本格化させた。担当教科内での研究授業を年2回実施し、学び合い週間では他教科の授業見学を奨励するなど、他者の授業を見る様々な場を設けている。さらに、アクティブ・ラーニング（AL）推進チームを立ち上げ、京都大学の松下佳代教授をアドバイザーに招き、通年で研修を行っている。その内容は「アクティブラーニング型授業通信」にまとめ、全教師に配布して共有する。これまではチームリーダーの前田教頭が通信を書いていたが、今後は参加者の持ち回りにする予定だ。

「通信の執筆を通して研修を振り返ることで、研修をより深く理解でき、自身の実践にもつながると思います。そうすることで、ALが校内により浸透していくのではないかと期待しています」（前田教頭）

ICT教育も本格的に始めた。既に電子黒板は全教室に整備されており、教師も1人1台のタブレット端末を持っている。そして、16年度、中学校1年生全員にタブレット端末を持たせ、クラウドベースの教育ツールをあらゆる授業で活用している。池田祥行教頭は次のように説明する。

* アドミッション・カリキュラム・ディプロマの3つのポリシーのこと。アドミッション・ポリシーは入学受け入れの方針、カリキュラム・ポリシーは教育課程編成・実施の方針、ディプロマ・ポリシーは卒業認定・学位授与の方針のこと。教育機関の特色を示すものとして、2017年4月から、大学には策定・公表が義務化される。

「二斉授業、協働学習、個別学習と、どの学習形態においても活用できるのがタブレット端末です。今後は、教師と生徒がともにPDCAサイクルを回すためにも、生徒の活動を記録するポートフォリオが重要になります。タブレット端末ならば生徒が身近に置いて、すぐに自分の活動や気づきを記録できると考えました」

教師の多忙化を軽減するツールとしてもICTの役割は大きいと、池田教頭は言う。例えば、宿題の配布と提出はクラウドを経由して行えば、手間や時間がかからない上に、提出物の確認が場所や時間を選ばずにできる。また、会議資料は共有フォルダに入れておき、閲覧済みを前提に会議を進め、会議の時間短縮を図っている。

「教師各自が作成した指導案や教材も、サーバーで蓄積して、学校全体で共有しています。ほかの教師の指導法や、前年度の指導内容が分かるので、各自の指導改善に生かれます。今後は、それらを体系化することで、授業の標準化にも生かしていきたいと考えています」(池田教頭)

授業改革でこだわったことの1つは、最先端の研究・事業を行う大学や企業などと連携することだ。

「二流に触れること自体が学びになる上に、指導を受けながら課題をやり遂げた経験は、生徒を大きく成長させます。それは教師も同じことで、最先端の研究をしている研究者から学び、議論することで、先生方の意識は変わり、教師間の足並みがそろっていきました」(工藤副校長)

よりよい教育を求めて カリ・マネを続ける

「中央教育審議会の答申や教育再生実行会議の提言を読み、本校の学校マネジメントやカリキュラムづくりの方向性は間違っていないと確信していた」と岩井校長が語るように、同校が進める学校改革はカリキュラム・マネジメントの観点が十分に盛り込まれている。毎年、生徒・保護者・教師へのアンケートと学校評価も行っており、カリキュラムのPDCAサイクルを確実に回している。

改革前とは学校文化が大きく変

わったと、池田教頭は実感している。「学校が決めたことだから行うのではなく、自分で考えて行うという意識を先生方が持つようになりました。新しい取り組みもスピーディーに進むようになっていきます」

現在は、岐阜大学の田村知子准教授の指導を受け、カリキュラム・マネジメントについて体系的に学び、授業改革に生かそうとしている。

一連の改革により、生徒の意識も変わりつつある。以前は、進路講演会の質疑応答の時間になると、会場が静まり返ることもあったが、今では生徒から多数の質問があり、外国人の講演者には何とか英語で質問しようとしている。さらに、海外研修の振り返りでは、生徒自ら「僕たちがグローバルリーダーにならなくてはいけない」と口にするようになった。スクールミッションが生徒にも浸透していることを、同校は実感している。

「学校説明会では毎回、数十人の生徒が、会場の案内、学校説明、保護者との質疑応答などをボランティアで担当します。その姿を見た保護

者から、『自分の子どももあのような生徒になってほしい』という声を聞きます」(池田教頭)

今後の課題の1つは進路指導体制の改善だと、工藤副校長は言う。

「ある生徒が『親を説得して、アメリカの大学に行く』と言ったということを知りました。改革の成果が表れていると喜ばしく思う反面、グローバルリーダーの育成を掲げているのならば、海外の大学への進学支援をするための体制を早急に整える必要があることを痛感しました」

岩井校長は、今後の展望として、教育活動に真摯に向き合うからこそ、カリキュラム・マネジメントを続けなければならないと語る。

「改革を進めていくと、成果と同時に新たな課題も見えてきます。その課題に取り組むと、また次の成果と課題が出てくる。その繰り返しによって、学校全体が理想とする目標に近づいていくのではないのでしょうか。よりよい形を追いかけるという積極的な姿勢で、これからの教育活動に取り組んでいきたいと思っています」